

外国につながる高校生に対するタスクと明示的指導を用いた 待遇表現の指導とその効果

望月麻佑実（お茶の水女子大学大学院）

1. はじめに

近年、外国につながる高校生への日本語教育が注目されており、2023年4月から「特別の教育課程」の運用開始が予定されている（文部科学省、2022）。高校在学中や高校卒業後の進学先・就職先で彼ら彼女らが、文法的な正しさだけでなく、相手との関係を損ねることなくコミュニケーションをとるために、相手や場に適した日本語使用が求められることが多くなると考えられる。コミュニケーションにおいては「人間関係」と「場」（2つまとめて「場面」）が重要であるとされている（蒲谷、2011）。これらの要素をふまえて行う表現に「待遇表現」があり、コミュニケーションを円滑に行う上で待遇表現は重要である（森、2002）とされるが、日本語学習者にとっては難しいと考えられる。このような背景から、外国につながる高校生の待遇表現の指導を行う必要性を考えた。さらに、本実践の対象者が、待遇表現のうち特に「敬語」について聞いたことはあるが重点的に習ったことがなく勉強したい意志があったこと、「敬語」は日本語母語話者にとっても難しく、明示的な指導が必要であると考えたことから実践を行った。

2. 実践の概要

本実践は、2022年9月から11月にかけて行った。①事前調査（対象者の背景を知るための事前アンケートと、事前理解テスト・事前産出テスト）、②指導、③事後調査（授業の感想や意識の変化などを問う事後アンケートと、事後理解テスト・事後産出テスト）を行った。

2.1 対象者について

本実践の対象者は、都内の高校に通う外国につながる高校生2名である。2名とも高校2年生で、母語は、Aがタガログ語、Bがタガログ語と英語である。滞日年数は、Aが4年1ヶ月、Bが1年9ヶ月であった。2名とも日本語指導が必要な生徒で、週に1回90分、発表者による日本語指導を受けている。日本語能力試験は受けたことはないが、普段の日本語指導から、N3程度の日本語能力は有していると考えた。会話も、日常的な会話はできるレベルであった。

2.2 実践の目標

本実践の目標は以下の通りに設定した。

- ①会話を聞いて、その会話を行っている人物の「場面」が理解することができる。
- ②「場面」に応じた待遇表現の使用ができる。
- ③適切な敬語使用ができる。

2.3 指導の内容

指導は発表者がすべての回、対面にて行った。指導は1回あたり約60分で、調査期間内に6回行った。指導は週に1回の日本語指導の時間を用いて行った。指導内容には、対象者に不安があった敬語だけでなく、人称代名詞、終助詞、呼称などの待遇表現に関わる言語表現すべてが含まれている。指導では「敬語」のみ明示的な指導を行い、その他の待遇表現については聴解やロールプレイ会話、文作成といったタスクを用いた。詳細な指導内容は表1に示す。

表1 各回の活動内容

第1回	事前理解テストで使用した場面を用いて、場面をどのように判断したかを共有する。敬語の種類・使用場面・形式の確認。
第2回	敬語の種類と形式の確認。短い普通体の文から丁寧体や敬語を使用した文への変換（お～なる/～なさる、お～する）。2人の人物によるやりとりの文章を2種類読んで、それぞれの場面を考える。短文作成。

第3回	音声を聞いて、それぞれ登場人物がどのような場面であるかを考え、そう考えた理由を共有する。動詞の敬語形への変換（敬語形が特別形である動詞）。
第4回	敬語形が特別形である動詞の復習。場面に適していない待遇表現がされている文章を場面に適したものに書きかえる。
第5回	敬語の種類・使用場面・形式の確認。ある2人の会話を聞いてどのような人間関係であるかの判断、使用されていた待遇表現の確認。設定された場面に則ったロールプレイ（3つの場面）と、ロールプレイの中でどのような表現を使用したかの確認。
第6回	場面に則ったロールプレイ（5つの場面）とロールプレイの中でどのような表現を使用したかの確認。

3. 結果と今後の課題

3.1 指導中の生徒の反応と指導を通じた生徒の変化

待遇表現の「理解」について、会話を聞いてどのような場面か、なぜそのように考えたかについてよく理解できている様子が見られた。ロールプレイ会話では、同じシチュエーションでも人間関係を変化させることにより、人間関係による表現の違いについて考えていた。第1回ではタスクへの反応が薄かったが、回を重ねるごとに反応が増え、第6回で行ったインフォメーションギャップを取り入れたロールプレイでは特に活発なやりとりが見られた。また、自身の学校生活での待遇表現の使用について尋ねたところ、Aは部活の先生で親しみを感じている先生に対しては少しくだけた表現をすることもあり、場面に応じた待遇表現を使用していたことがわかった。

待遇表現の「産出」について、Bに大きな変化が見られた。指導前は親しい友人同士での会話であっても丁寧体の使用がほとんどであったが、指導を通じて普通体での会話もできるようになり、自己表現の幅が広がった。

敬語について、第1回では敬語の種類・使用場面・形式を結びつけることが難しく、苦戦している様子が見られた。指導の度に敬語の種類・使用場面・形式を確認することで、少しずつ敬語に慣れていった様子が見られた。また、「いらっしゃる」「おっしゃる」のような学校生活で聞く機会がある特別形の敬語に関して、元の動詞を説明した際には納得した表情をしており、気づきを与えるきっかけになったと考えられる。指導後の産出テストでは「進学希望の大学に資料請求をする」という敬語使用があるとより良いと考えられる場面で、「〇〇と申します（Bの発話）」「入試を受けるためにどのような書類が必要かお聞きしたいんですけど…（Aの発話）」といった謙譲語の使用があった。このことから、明示的指導と練習を行うことで敬語の形式や使用場面について深く学ぶことができたと考えられる。

3.2 考察と今後の課題

本実践では、待遇表現に関する言語表現全体を取り扱った。本実践の対象者2名は、待遇表現「理解」に関して、2人の人物の会話であれば十分に理解できることがわかった。そこで、さらに会話に登場する人物が増えたときの理解度を高められるような指導を行うことへの可能性を感じた。「産出」に関して、指導でロールプレイや文作成のような産出活動を取り入れることで自己表現の幅が広がることがわかった。「高校」という様々な人間関係の相手がいるという環境の強みを生かした指導を考える必要があるだろう。また、敬語に関しては進路指導と併せて行うこともできるのではないかと考える。

【引用文献】

蒲谷宏（2011）「コミュニケーション教育の意味を考える」『日本語学』30（1）明治書院、pp. 4-12

森勇樹（2002）「日本語教育における待遇表現指導のあり方について—効果的な指導法を目指して—」『語文と教育』16 鳴門教育大学国語教育学会、pp. 59-48

文部科学省総合教育政策局国際教育課（2022）「高等学校等における日本語指導の制度化（案）について」文部科学省 https://www.mext.go.jp/content/20220124-mxt_kyoiku02-000019798_3.pdf（最終閲覧：2022年12月23日）